



国道を境に海と山、それぞれの暮らしが営まれている里郷。  
大村湾に突き出た歴史ある串島を歩き、  
漁港では本物の漁師さんに出会った。  
山に上がれば見事な夕景が待っていた。

制作 地域おこし協力隊  
文 飯塚将次  
写真 堀越一孝  
編集・デザイン 小玉大介





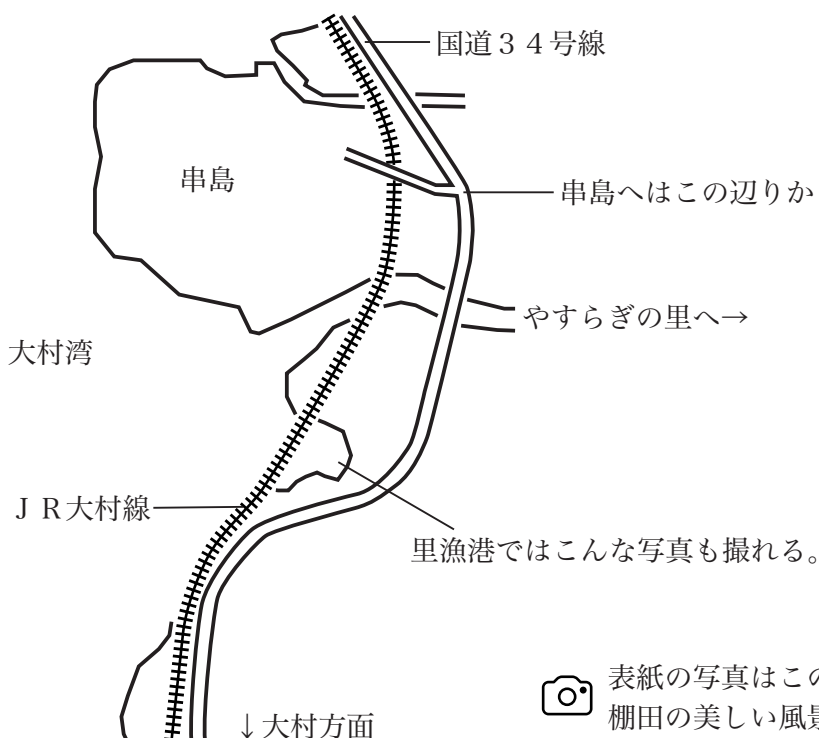
里漁港でお話を聞かせて頂いたお母さんたち  
左から、末永敏子さん、溝口フヂさん、田崎リシ子さん

町内の郷を歩き始めて、今回が初めてとなる大村湾に沿う海エリア。まずは町民でも足を運ぶ人は少ないという串島に足を踏み入れた。串島はかつて歴史の舞台があったところ。元弘元（1331）年、後醍醐天皇が鎌倉幕府を倒そうと打って出たが敗れ隠岐へ、親王方も各地へ流された。尊良親王もその1人として土佐へ、そして肥前のこの地へ流された。その際に、地元の豪族江串三郎入道が尊良親王をかくまったという。今では串島城址の面影はないが、城屋敷や城坂など地名が残っている。

地図を見ると、串島の入口は1か所しかない。JR線路の橋上から、うっそうとした木々の道を歩く。沖縄のどこかのサトウキビ畑から海に出るところみたいだ。

串島に人は住んでいない。川も水路もないが配管が整備され安定した水を供給できることから、さまざまな農産物が栽培されている。驚いたことに、標高20～30mのこのあたりでもお茶は栽培されていた。比較的温暖な気候ということで、町の中で一番早くお茶ができあがる。味も抜群という。

畑の中をぐるっと回って元の場所に出た。海には出られなかった。



表紙の写真はこの辺りから撮影。  
棚田の美しい風景が広がる。



いったん国道に出て江ノ串橋を渡る。橋の上から江ノ串川を見るとたくさんのチヌが泳いでいた。しばらく歩くと、里漁港に出た。全国でも珍しい防波堤に囲まれていない漁港で、海側は土などで盛られたJRの線路のみ。無機質なコンクリートが目立たない分、風景にとけこんでいていい感じだ。

漁港の端の方で足湯のような、池のようなものを見つけた。地元のおじいさんに話を聞くと、「清水」という湧水が出ているという。3段に分かれているのが面白い。おじいさんが1段目から柄杓ですくって水を飲む。「飲んでみな」と無言で柄杓を渡される。清冽でうまい。ゴクゴクと乾いたのどを潤した。

どうやら上から飲み水用、野菜などを洗う用、魚などを洗う用になっているようだ。水道が整備される前は、冷ごはんと梅干しを持ってきて、湧水をかけて食べていたそう。「夏の暑い時に食べるとおいしかですよ」と相好を崩した。豊富な湧水は近くの石垣からも港へ流れ出ていた。



里漁港の憩いのスペース  
濱田さん夫婦を囲んで盛り上がる

ここにいるだけでゆっくりとした時間が流れる。時折、行き来するレトロな車両も絵になる。

しばらくボーとしていると、女性たちがぼつぼつと出てきた。漁を終えた船が戻ってくる時間のようで、みんな同じ方向を見つめている。

エンジン音と黒煙とともに船が次々と入ってきた。接岸すると、みんな手際よく本日の成果を運んでいく。バケツには良型のシロギスがぎっしり。パールピンクがきらきらしてきれいだ。

最後に、小さな鉄橋をくぐって濱田徳雄さんの蛭子丸が到着。奥さんのみち子さんと2人で沖に出ている夫婦船で、シロギスをたくさん獲ってきた。

「今日はなんね？」と待ち受ける私たちに戸惑いながらも話を聞かせてくれた。徳雄さんは中学を出て50年以上も沖に出ているベテラン漁師。蛭子丸は徳雄さんで4代目という。県の認可を受けた吾智網漁に3～11月は毎日出船している。

「戻ってきてからも忙しかよ。こしらえんば」とみち子さん。昔は、マダイやチヌは丸1尾を、キスなどはバケツに入れてそのまま市場に卸していた。しかし、時代が変わった今はそれでは売れない。消費者のニーズにあわせて、腹わたはきちんと取り出し、刺身用はサクにして、主に道の駅に並べている。特に刺身にこだわる徳雄さんは、夕方まで売れ残っていたら早めに回収してしまうとか。「自分が食ってうもうなかもんは出さん」と。



丁寧な包丁使いでマダイをさばく  
濱田徳雄さん



港で2人が作業していると、自然と多くの人が集まってくる。「夫婦漫才みたいでおもしろかでしょ」という声に納得。「けんかばかり」と夫婦で声を揃えるが、沖へ出て漁をし、戻ってきて魚を丁寧にさばき加工するまで、すべて2人でこなす。息のあったコンビだからこそ仕事も早い。最後は徳雄さんがホースで水を撒いて、みち子さんがデッキブラシでこすって港をきれいに掃除していた。漁師さんの後継者が不足しているといわれるなかで、濱田さん夫婦のような人が現役で貴重な海の幸を提供してくれていることがわかり、とても嬉しくなった。

「ところでムラの方には行って見たの？」

里郷では国道から山側をムラといい、海側をハマというそう。ムラは田植えの真っ盛りで、一番の高台に行ってみると棚田が広がる絶景が待っていた。ハマでのんびりし過ぎてしまったが、沈む夕陽を眺めながら、またしばらくボーとしてしまった。ハマもムラも素敵なおとこだった。

※里郷へは、町営バス「江の串」「里」「才貫田」のバス停を利用。

次回は八反田郷。お楽しみに！



田植えを終えた棚田の向こうに大村湾。ゆっくりと日が沈む